

第一章 郷土の概要

1. 地区の特性

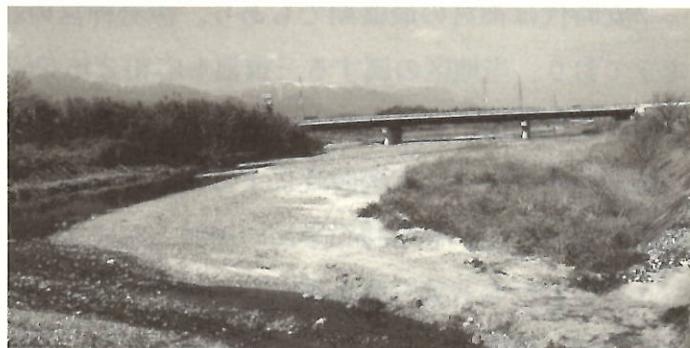
神前地区は、菅原町、寺方町、高角町、曾井町、尾平町の五町からなる地域で、四日市市街地の西方約5kmに位置し、南は三滝川、北は緑あふれる丘陵地帯にはさまれた東西約5kmの細長い静かな田園地帯である。地区には、四日市商業高等学校・四日市中央工業高等学校と二つの県立高校があり文教地区となっている。地区西部には「大日さん」で親しまれる大日寺があり、その本尊は木像としては、日本でも二番目に大きい大日如来坐像として有名である。

地区活動の特色としては、青少年の健全育成に柔道を取り入れていることで、昭和57年の全国高等学校総合体育大会では、神前柔道教室から育った選手が優勝している。また基本的人権を尊重する明るく住みよい地区を目指しての取組も連合自治会、社会福祉協議会、同和教育推進協議会、婦人会、子供会、老人会等各種団体が連携して活発に行われている。

東部の尾平地区は、住宅団地の開発等による著しい人口の増加、大規模商業店舗の進出等、環境の変化はあるものの以前からの自然環境は、大きく崩されておらず今なお多くの緑を残した町並みを形成している。

地域を代表する河川として、三滝川とその支流の矢合川があり、田園

の灌漑用水や伏流水を利用した四日市市西部地区の水道水の確保など大きな恵みを受けている。三滝川は普段わずかな流量であるが（この川の水は、上流より伏流水となっている



三滝川



神前地区の風景（1）

ため）、台風等で大雨が降ると増水し激流となり、昔は堤防の決壊、橋の流失に悩まされてきた。増水時は、ほら貝を吹いて地区民を集め、堤防の警戒に当たると共に堤防上の松を川へ切り倒したり、蛇籠、三つ又を組んだりして川の流れを変え堤防を守った。また橋は木橋で幾度も流失したが、その度に橋板や三つ又により仮橋を設営するのも地元民の仕事であった。昭和38年に、高角橋、記念橋（昭和57年に神前橋と改称）は、鉄筋コンクリートの橋に架け替えられ、また川床も下げられたため堤防の決壊、橋の流失の心配は少なくなっている。その後、道路網の整備により平成15年、尾平町南地区の柳橋を閉鎖し新しく尾平橋、また、高角町には新高角大橋が新設されている。

2. 地区の生い立ち

神前地区は、尾平町で発掘された永井遺跡、上畠遺跡から考えると弥生時代のころから東西文化の影響を受けて、早くから水稻耕作が行われ集落が形成されていたようである。

大和朝廷による日本統一が進み、大化の革新の頃になると、当地区は伊勢の国三重郡柴田郷の一部となり、西野、寺方、高角、曾井、尾平の5ヶ邑むらがあった。

平安時代は神宮の最盛期でもあり、伊勢神宮の荘園として知られる御園、御厨みくりやが各地にできており、当地区の属する三重郡も応和2年（962）に神宮領となる。神前地区には、高柳御厨、長松御厨、曾井御厨、高角御厨、極楽寺御厨があった。

鎌倉幕府成立後、北条時政による將軍頼家殺害をきっかけに、元久元年（1204）三日平氏の乱が起ったが、その時の平氏の居城として曾井城、高角城等があり、高角城は張本人の一人といわれる若菜五郎が築城した城であるといわれる。

西野村、寺方村、高角村は1村であったが、文禄3年（1594）太閤検地のあったとき、それぞれ分離独立したという。

江戸時代になると、天領（幕府領）と成了曾井村を除いて津藩領となり、寛文9年（1669）に津藩から久居藩が分封されると、寺方村の一部、高角村、曾井村の一部、尾平



神前地区の風景（2）

村の一部が久居藩領となった。その後、宝永6年（1709）に曾井村の天領が長島藩領となり、文化・文政（1804～1829）のころには、久居藩領が津藩領にもどされていたようである。さらに幕末のころになると、西野村、寺方村の一部が津藩領、寺方村の一部、高角村、曾井村の一部、尾平村が久居藩領となり曾井村の長島藩領が天領にもどるなど大名の領地替えが江戸時代を通じて行われている。

慶応元年（1865）四日市宿の助郷一揆が津藩、久居藩領の村で起きた。

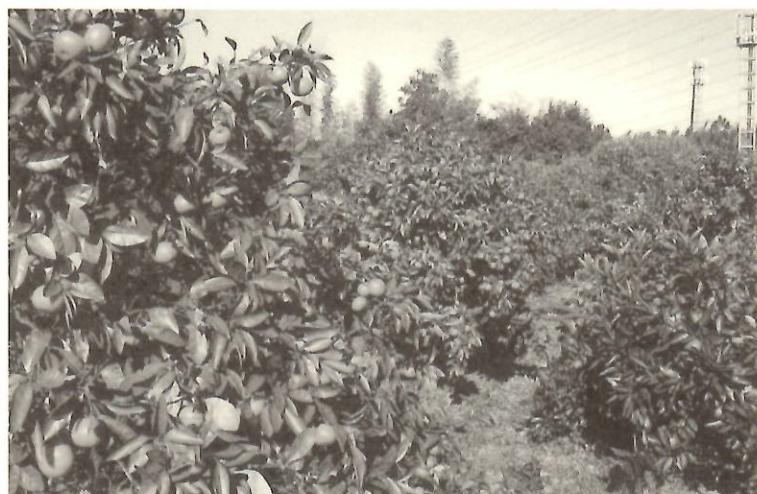
明治4年太政官布告により新しい戸籍法が制定され、翌年9月全国で戸籍が作られた。この年が壬申の年であったので壬申戸籍と呼ばれるようになった。今までの人別帳のようなものではなく、屋敷に番号をつけて全国民を戸によって把握し、全国を区（番号制）に分けて区長、副区長を置き戸籍事務を担当するが、内容は国民を平等にあつかっていない記載があった。明治11年に郡区町村編制法が公布され翌12年に番号制の区を廃止し、郡町村名を復活している。

明治6年成立したばかりの明治政府の最大の課題である、富国強兵を行うための財源確保の方策として地租改正を行った。これまで長く続いた物納制度から金納への改正に農民は大変苦しんだ。村や農民を無視した明治政府の強行政策に対して、三重県がこれを実施しようとした、明治9年に地租改正反対一揆（伊勢農民暴動）が起こり、税率は100分の3から100分の2.5に減額された。このとき新築されたばかりの曾井学校も焼き討ちにあい、後日政府より金貳拾円を扶助金として交付されている。

明治12年の郡区町村改正により高角村に戸長役場が置かれ、高角村、西野村、寺方村、曾井村（尾平村は少し遅れて明治17年に参入）がこれに属した。

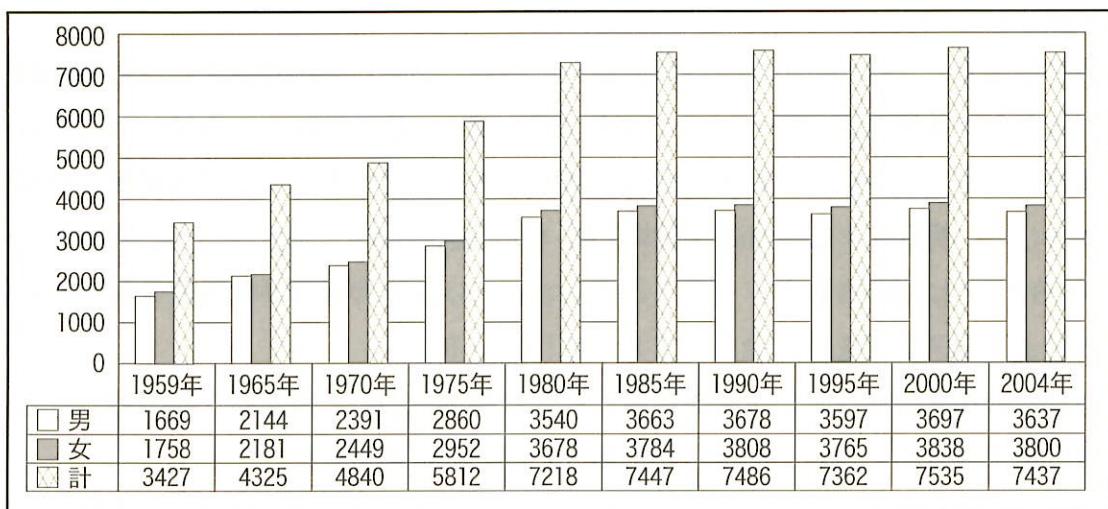
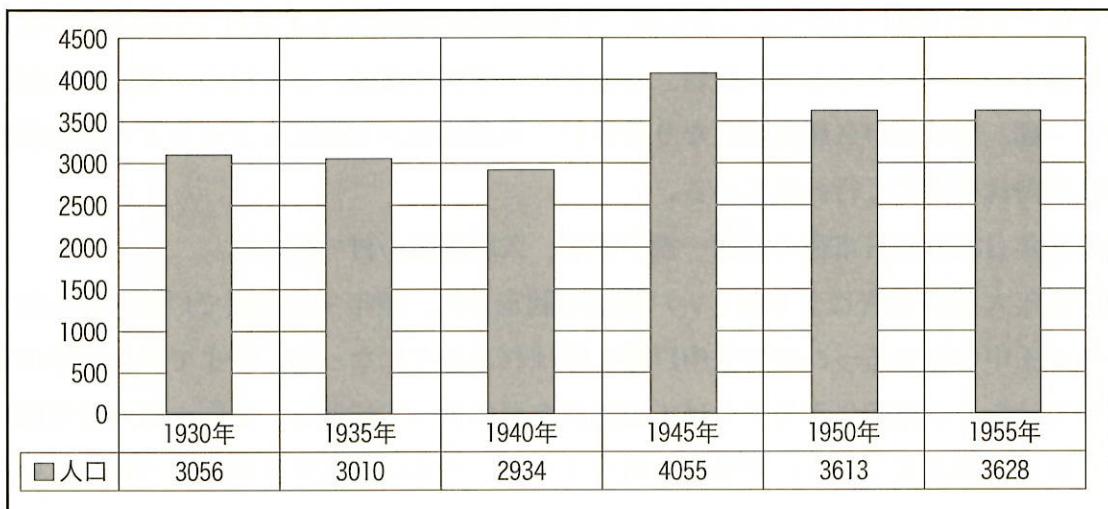
神前村となったのは、明治22年で5ヶ村を併合し、式内社神前神社の名にちなんで神前となづけられたといわれる。そのとき、旧村名が大字名に改訂された。

昭和29年町村合併促進法を機に四日市市に合併した。合併の際大字名が変更され、菅原町、寺方町一区、寺方町二区、高角町、曾井町、尾平町となり農村地区として発展した。昭和39年9月に伊勢湾台風で被害を受けた石原産業の社宅が、尾平町の丘陵地に住宅地を造成して上名ヶ丘地区が誕生した。さらに、昭和52年には、三重団地に隣接して美里ヶ丘団地が開発された。



曾井町のみかん山

神前地区の人口の推移



面 積 7.40 km²
世帯数 2,499戸
(2000年 市民統計資料による)

3. 年代と主な出来事

年 代	主 な 出 来 事
弥 生 時 代	水稻耕作が行われる
平 安 時 代 応和2年(962)	神宮領となる
鎌 倉 時 代	高角城、曾井城が三日平氏の乱の際、伊勢平氏一党（若菜五郎等）の居城となる
江 戸 時 代	津藩領（曾井は天領）その後領地替えにより長島藩領・久居藩領となつた所もある
明治8年(1875)	曾井学校設立（西野、寺方、高角、曾井の4ヶ村で設立）
明治12年(1879)	高角村に戸長役場が置かれる
明治22年(1889)	西野村、寺方村、高角村、曾井村、尾平村を合併、神前村となる（町村制実施による）、高角尋常小学校（曾井学校）が、神前尋常小学校と改称
明治29年(1896)	三滝川が決壊、大洪水となる
明治41年(1908)	神前村役場が新築される
明治43年(1910)	高角橋竣工
明治44年(1911)	神前村農業補習学校開設（青年衣学会）
明治45年(1912)	矢合橋竣工
大正2年(1913)	四日市鉄道(株)の軽便鉄道、諏訪一湯の山間開通
大正4年(1915)	三重郡立農業学校を尾平に開設
昭和15年(1940)	記念橋竣工
昭和23年(1948)	桜村、川島村、神前村三ヶ村組合立平和中学校を設立
昭和28年(1953)	神前村立幼稚園開設
昭和29年(1954)	四日市市へ合併
昭和33年(1958)	四日市市役所神前出張所落成、移転、公民館を併設
昭和35年(1960)	尾平町に上水道通水開始（菅原町、曾井町、寺方町は同45年、高角町は同46年通水）
昭和38年(1963)	高角橋・記念橋 鉄筋コンクリート橋に架け替え
昭和40年(1965)	矢合橋 鉄筋コンクリート橋に架け替え
昭和50年(1975)	神前市民会館落成（平成17年に人権プラザ神前と改称）
昭和56年(1981)	神前地区市民センター落成
昭和57年(1982)	記念橋を拡幅改良、神前橋と改称
平成15年(2003)	柳橋閉鎖 尾平橋竣工 新高角大橋竣工

4. 郷土各町の歩み

■菅原町（西野村）

三滝川の左岸にあり、北東は朝日立陵によって限られる。古くは「西ノ野村」と称され、その後「西野村」と改称されている。当村は、極楽寺御厨内にして寺方村と一村たりし。按するに、この地は原野で、字名を西ノ野と称したるを開拓して独立し、字名を用いて村名とするならん。と「西野村村誌取調書」（明治20年編纂）に記載されている。江戸時代を通じて津藩領、寛延(1748～1750) 戸数32戸、人口130人、牛7頭、天神1社があった。



菅原町の公会所前

文化11年(1814)には、村内南川原に3反の新田開発が行われた。この新田は、文化8年より惣百姓の出合によって開発された。出合日数の過不足は、一日につき米二升をもって精算。不足分で得られた米代、銀110匁余りを酒代・杭代などの財源とした。

新田は17に区画されくじによって、それぞれに1区画づつ割り当てられている(南川原新田開発帳)。文化5年(1808)以降、村高のうち28石の助郷を勤めた。天保5年(1834)の御物成并小物成御通帳によれば前年度の本途物成は、村高139石余りに対し免3ヶ4分9厘5毛、取米は48石余り、口米などを含む納入額は127俵余り、小物成は30俵余り。明治5年(1872)戸数25戸、人口112人、牛3頭、神祠に天満宮、山神。用水は三滝川より引き溜池1、天治元年(1864)より明治2年まで四日市駅の助郷を勤めた。

昭和29年より現在の町名「菅原町」、元は神前村大字西野。町名の由来は村社菅原神社にちなむという。昭和34年戸数32戸、人口143人・昭和45年戸数48戸、人口166人。

昭和37年三重県立四日市中央工業高等学校が開校した。

平成15年現在 世帯数85世帯、人口251人

■寺方町（一区・二区）

三滝川左岸立陵の裾に位置し、南は高角村と接し五鈴遺響に「高角と一邑にて南北に分かれり寺方の名義は、高角山大日寺あり故に名く」とある。

往古は、極楽寺御厨の地で、村内の旧字名に奥ノ坊、西大門、東大門、極楽寺、寺垣内、御堂前、鐘田、護摩田、地田等があり、村の多くが大日寺の境内であったとされており、高角の寺の方と土人（土着の人）が呼び、後に「寺方村」と称せられた。

江戸時代初期は津藩領、寛文9年(1669)村高の内253.69石を支封久居藩領とした。

寛延(1748～1750)頃の当村は、津藩領(266.88石)の戸数55戸、人口237人、牛6頭。久居藩領(256.69石)の戸数40戸、人口152人、牛1頭。

天明5年(1785)～文政6年(1823)の間に17回も干魃にみまわれ、出作百姓の困窮は、はなはだしかった。数回の干魃に対しては、百姓持林を売却するなどして対応したが、やが



寺方町一区の公会所前



寺方町一区 出屋敷

てこれも売り尽くし借金も増加したので、文政7年に集落より2丁余りの北奥へ出作百姓を移住させることが計画された。北奥は久居藩領に属し田畠42町余りがあったが、村より離れ水守などの悪条件のため、従来は十分に耕地として利用されていなかったところである。北奥（出屋敷）へは百姓42軒の内、津藩領より7軒、久居藩領より3軒、計10軒、人口にして56人を移すもので、そのため1軒あたり金10両、牛1頭あたり3両、計115両の資金を両藩に出願した。

嘉永7年(1854)の地震により死者1名、家屋全壊2戸があった。

明治5年の津藩領分の村明細帳では戸数67戸、人口男126人、女116人、計242人、牛7頭。職人は木挽1、ほかに酒造り1があった。寺院は高角山大日寺（天台宗）、寺方山光徳寺（浄土真宗本願寺派）、神祠は若宮八幡社、白山社、山神2。

平成15年現在 1区世帯数131世帯、人口386人、2区世帯数119世帯、人口285人。



寺方町二区

■高角町

三滝川と矢合川が合流する地点に位置し、三滝川の左岸台地に昔からの居住地域があり、三滝川、矢合川の両側に農地が広がる典型的な田園地帯である。

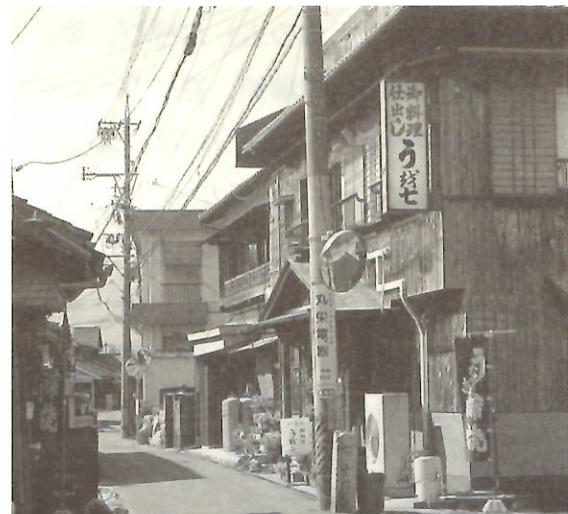
高角町の最大の行事として、伊勢神宮より拝領した鳥居を延喜式内神前神社に奉納する「御木曳き」(せんぐう)が遷宮にあわせ20年毎に、町をあげて盛大に行なわれる。

高角の地名の由来は、いつ頃からこのように呼ばれたかは不明であるが、「高角村 村誌取調書」(明治20年編纂)によれば、本村ハ昔古ヨリ、三重郡柴田郷ニ属ス、村名高角村ハ「神鳳鈔」「東鑑」等ニ載タレハ古來換名ナク、正ニ高角村ト称スルナリ。とあり、高角の地名は、高角御厨としてあらわれている。高角御厨は「神鳳鈔」では神宮領とみえ、田積十五町、上分米内宮一石八斗、外宮一石五斗(各6、9、12月)同神田四斗三升とある。

「御厨御園帳」の頭注に「宮」「出納所」とあり、外宮出納所の直轄地であった。地内には「天下森」「御所ノ花」「高塚」「神前左門」「神前」「神前ヶ下」等御厨田をうかがわせる字名(旧字名)が残っている。当時の地名は三重郡柴田郷高角邑と称された。

「東鑑」には、元久元年(1204)いわゆる三日平氏の乱に際して張本人若菜五郎が城郭を構えたところとして「伊勢国日永、若松、南村、高角、関ノ小野等也」とあり。高角城址は寺方町の大日寺付近にあったと推定されている。

室町時代には智積御厨域に含まれていたと推定され、長禄2年(1458)の伊勢国智積御厨



高角町の街角

年貢帳（醍醐寺文書）には、高角淨蓮左衛門、同淨蓮五郎兵衛の名前がある。

神宮領として比較的長く続いたようで、天正11年(1583)の内宮神領本水帳写では「壱石八斗 外記助 たか津の」とある。また、同12年頃の織田信雄分限帳では、津田小平次が「高角の郷」で八百貫文を知行していた。

文禄3年(1594)（太閤検地のあった頃）高角村より寺方村、西野村が分離する。江戸時代には大名の転封（領地替え）のためか、政策として飛地支配がとられ高角村は、初め津藩領の飛地として支配を受けるが、寛文9年(1669)に津藩から久居藩が分封され久居藩領となる。その後津藩に戻り幕末には再度久居藩の領地となっている。

寛延(1748～50)頃の「宗国史」によれば、戸数 145戸、人口 578人、馬1頭、牛13頭、寺院は、金徳山金剛寺（天台宗）、流東山圓勝寺（浄土真宗本願寺派）、喬陵山林正寺（真宗大谷派）、神社は、延喜式内神前神社と伊奈利神社（明治40年合祀）がある。

高角町（矢合含む） 平成15年現在 世帯数527世帯、人口1,639人

高角町矢合地区

当地区は、昭和49年6月高角町自治会から分離、独立した新開地区で、矢合川と一生吹山の間の高角町矢合の水田地帯にある。近鉄湯の山線高角駅と三滝中学校があり、桜、川島、神前地区の境界の土地で近年宅地化が進み、また、名阪国道四日市I・Cに近く交通の便がよいことから商工業の進出が多く発展した地区である。



矢合地区と近鉄湯の山線

■曾井町

三滝川の中流左岸に位置する。地名の由来は、地内に和泉式部が容顔美麗なることを見始めたという井泉があることによる。文治年間(1185～1189)に志村右衛門（曾井入道）が

居城し、三日平氏の乱に討伐されたと伝えられる曾井城跡が字東垣内にある。

古くは曾井御厨と呼ばれ神宮領であった。豊臣時代は秀吉の家臣の290貫文の給地として「そいの郷」がみられる。

江戸時代は幕府領（天領）369石、津藩領116石の相給地で幕府領は、宝永時代（1704～1710）に一時長島領になり、天保13年（1842）にまた幕府領となる。

寛延頃（1748～1750）の久居藩領分の人口は104人、戸数は21戸であり天保頃（1830～1843）の長島藩領分の人口は233人、戸数51戸、牛7頭。寺院は宝厳山真教寺（浄土真宗本願寺派）と保曾井山観音寺（臨済宗妙心寺派）がある。神社は保曾井神社で両領相持ちで祭礼が行われた。村の用水は三滝川からの取水より引き、上流の寺方村、高角村に井料として毎年米・酒をそれぞれ二斗支払っていた。

鳥居道山に入会権を持つ他、両領入会の原野が1.5町余、百姓持山が5.8町余ある。水車は両藩領分にそれぞれある。

平成15年現在 世帯数256世帯、人口814人



曾井町保曾井神社付近

■尾平町

三滝川の中流域に立地し、北側は丘陵により限られる。地名の由来は山岡（永代寺）の尾崎で、平坦な地であることに由来するという。

弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡の永井遺跡がある。永井遺跡北部の小高い丘に県立四日市商業高校があるが、この地は長松山永代寺の廃寺跡である。永代寺は天平8年（736）に僧、行基菩薩建立の七堂伽藍の巨刹であったというが、永禄11年（1568）織田信長の伊勢攻めで焼失し、白彫の阿弥陀・釈迦・薬師のうち、阿弥陀仏は、兵火を逃れて野田の悟真寺の本尊として安置されたという。（現在は焼失のためない）

なお、弘法大師が天長年間（824～833）に永代寺で彫刻したという不動明王の像が、欣浄寺に永代寺の遺物として安置されている。

古くは外宮領長松御厨の故地（もと所有した土地）とされていた。長松御厨は内宮領のそれもあり、両者の関係は不明。豊臣時代は家臣石川修理がこの地で330貫文の知行を得ていた。



尾平町の風景

江戸時代は津藩領、寛文9年(1669)支藩久居藩に分封、津藩領は110石余、久居藩領は681石余。分封後は両者の相給。寛延頃(1748～1750)すべて久居藩領、戸数139戸、郷士2人、人口572人、馬2頭。主な産物は米、大麦、小麦、諸豆、茶、桑など、古くは、小牧村と称し正徳3年(1714)小牧村より尾平村となる。

文政8年(1825)初代の柳橋が三滝川に架けられた。

明治20年、神社は神明神社（祭神は天照大御神ほか10体）と一見靈社、寺院は厭穢山欣淨寺（浄土真宗高田派）と薬師堂である。官有地7反余、生業戸数は農家100戸、農商兼業23戸、工業9戸。農閑期に製茶業や水車業等を営み婦女は綿糸から木綿を産する仕事に従事した。

平成15年現在では、577戸で、西組、東組、中村、永井、水上、新高平、上畠、石塚の8総代制にて自治会が結成されている。なお、橋向自治会は昭和56年尾平町南として分離した。

また、国道477号線バイパスの両側には、ジャスコ（平成10年竣工）とJA四季菜（平成16年3月竣工）ができ発展している。

尾平町（南含む） 平成15年現在 世帯数828世帯、人口2,125人

尾平町南地区

尾平町南地区は、世帯数106世帯で昭和56年尾平町自治会より分離した。尾平町柳橋（現尾平橋）の南北でなりたつ。湯の山街道に家屋が立ち並び交通量が頻繁な土地で、常磐地区大井手と隣り合わせて、現在三滝川の北側も住宅が建ちならび発展している。



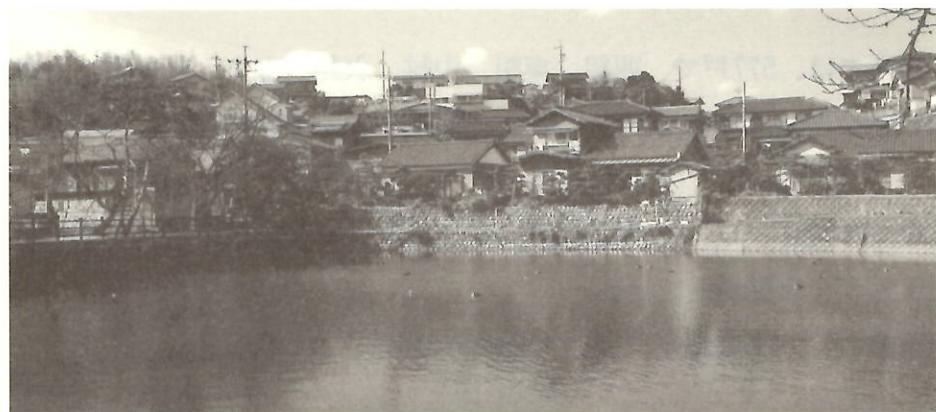
三滝川と尾平町南地区

また、三滝川にかかる従来の柳橋は、道路網整備により平成15年閉鎖され、同年新らしく尾平橋として竣工した。

上名ヶ丘地区

上名ヶ丘地区は、昭和34年9月26日伊勢湾台風の被害を受けた石原産業の中里社宅の移転地として、昭和35年尾平町の上名・水附・谷田の一部を石原産業が買収し、昭和39年9月に住宅団地として開発された。146世帯にて構成された地区で四日市でも早い団地（市営住宅なし）である。塩浜地区の中里社宅より会社ぐるみの移転でそのまま字名をとって上名ヶ丘を団地名とした。

平成15年現在 世帯数156世帯、人口409人



谷田池と上名ヶ丘

美里ヶ丘地区

美里ヶ丘は、昭和50年に尾平町字谷田（太平洋戦争中は谷田山に海軍の高射砲基地があった）に出来た団地で隣接の三重地区生桑町には第二美里ヶ丘がある。三重団地に隣

接しており通学区は小学校が三重西小学校、中学校が三重平中学校となっており、行政区は神前地区に入っている。

平成15年現在 世帯数516世帯、人口1,553人



美里ヶ丘集会所前